

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05657

研究課題名(和文) オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究

研究課題名(英文) A Study of Russian-speaking People outside of Russia through Their Oral Histories: Their Oral Languages and Cultural Shifts

研究代表者

柳田 賢二 (YANAGIDA, Kenji)

東北大学・東北アジア研究センター・准教授

研究者番号：90241562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,800,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア欧州部、シベリア、バルト三国、ジョージア、アルメニア、カザフスタン、ウズベキスタンにおいてソ連時代のオーラルヒストリー聞き取りを中心とした現地研究を行った。その結果、研究チームでは、「対露感情の如何にかかわらず、またバルト、カフカース、中央アジアという極めて大きな気候差と本来あったはずの地域・宗教・民族文化差にもかかわらず、旧ソ連諸国には共通した生活文化と思考様式がある。ソ連は崩壊したが消滅したわけではなく、特に『プロパガンダ国家』、『密告社会』、『全体主義的国家観』といったその負の遺伝子が、いずれの国においても変異しつつ受け継がれていると言えるのではないか」との感想を共有するに至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

旧ソ連諸国には共通した思考様式がある。現在それは、個人よりも国家を上に置き、密告を奨励し、その時々政策に反する思想を持つ者をあぶり出して警察的手法で排除しようとする「密告社会」や、嘘と分かっていることを繰り返し宣伝して人々の常識にしようとする「プロパガンダ国家」といった負の側面に特に顕著に見られる。反露国家となったウクライナやジョージアも、EUとNATOに属す「西側」の国となったはずのバルト三国も、この点は同じである。後者には「言語警察」的行政機関が存在し、ロシア語系住民が職場で母語を話すことすら憚られる一方、ロシアを仮想敵とした民兵や軍事教練までもが存在する。東欧の緊張の無知は危険である。

研究成果の概要(英文)： We made investigations into the mentality of the “Russian-speaking” inhabitants of European Russia, Siberia, Baltic States, Georgia, Armenia, Kazakhstan and Uzbekistan, mainly by means of collecting oral histories of the Soviet Era.

Despite enormous cultural and religious differences, which must always have been between Russia, Baltic States, Caucasus and Central Asia, the nations of the former Soviet Union have a common culture in life and a common way of thinking. And what is more, such common features are shared by all the former Soviet republics, regardless of the nations’ different attitudes to the former Soviet Union and to contemporary Russia. It might be possible to say that although the Soviet Union collapsed, it did not disappear. Such negative genes of the Soviets as ‘Propaganda state’, ‘Society of citizens informing one against another’ and ‘Totalitarian definition of a state’ continue to be inherited with mutation in each of the former Soviet republics.

研究分野：ロシア語学、社会言語学

キーワード：オーラルヒストリー 旧ソ連 ロシア語 言語接触 ソビエト文化

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、2013年度までに研究代表者柳田賢二と当時山形大学に在勤していた研究分担者中村唯史の間で、日本ロシア文学会東北支部研究発表会の場で、ロシア外(とりわけ「南」のカフカースと中央アジア)の旧ソ連諸国に残ったロシア語を母語とする住民のロシア語の変容および文化変容についてたびたび意見交換をしたことに端を発する。柳田はライフワークとしてウズベキスタンを中心に中央アジア多言語社会におけるロシア語の言語変化を継続的に観察しており、また、中村はロシア・ソビエト文学における「南」(とりわけカフカース)の表象に強い関心を抱いてきたからである。こうした経緯で本研究の内容に近い科研費課題案を考えて2014年秋に応募したが、この時は不採択であった。このため再度計画を練り直して翌2015年秋の科研費課題公募時に再び応募したところ、2016年4月に交付内定を得た。これが本研究課題である。ところが前年秋の応募時に研究分担者に予定していた者1名(当時東北大学特任助教)が4月に入り突然遠隔地の研究機関に転出することとなったため研究分担者を一部入れ替え、中村唯史(京都大学文学研究科教授)のほかロシア・ソビエト演劇を専門とし、当時特にシベリアにおける文化変容に関心を持っていた楯岡求美(東京大学人文社会系研究科准教授)の2名として交付を得ることとなった。

平成28(2016)年度は初年度であり、本研究の代表者・分担者の各人とも旧ソ連の一般人を対象とするオーラルヒストリー聞き取りは初めて取り組む作業であったため、文字通りの手探りからスタートした。この科研費は当初旧ソ連のうち「南」(中央アジアとカフカース)および「東」(ロシア連邦内で主にシベリアにある民族共和国)を主たる対象地域としていたが、2016年度内の研究により、旧ソ連市民の移動には、独ソ戦による国土荒廃とフルシチョフ期の農業政策失敗による食糧危機が本研究計画立案時に考えていたよりもはるかに大きな影響を及ぼしたことが明らかになり、またロシアから見て「西」にある第2次大戦の激戦地から中央アジアや南ロシアという「南」に移動した者が多いことが判明した。このため、2017年度よりロシアから見た「西」を担当してもらうためにバルト・スラヴ語学を専門とし、ラトビア語に通じた堀口大樹(岩手大学人文社会科学部准教授=当時=)を研究分担者に加えた。また、研究協力者として京都大学東南アジア地域研究所准教授の帯谷知可(中央アジア地域研究)(カザフスタン調査担当)と東京大学文学部非常勤講師の毛利公美(ロシア文学)(アルメニア調査担当)の両氏に加わっていただいた。

### 2. 研究の目的

研究代表者の柳田は2001年度以来いくつかの科研費の採択を得て、中央アジアにいながら東アジア系言語を話す特異な少数民族であるウズベキスタンの朝鮮人(朝鮮語での自称は「高麗人」とキルギスのドゥンガン人(ドゥンガン語での自称は хуэйдзэ「回族」)のほかウズベク人、キルギス人、ウズベキスタン領内のタジク人といった様々な民族の人々のコードスイッチング言語と、そこにコードの1つとして現れるロシア語を観察してきた。その結果、中央アジアのウズベキスタン、キルギス、カザフスタンの3国の現地民族住民によって話されているロシア語には、特に音韻面と統語面において話者の母語がいずれであるかにかかわらず共通して現れる非規範ロシア語的特徴があり、若年層のロシア語単一話者においても同じ現象が現れ始めていることに気付いた。また分担者の中村は2012年にアルメニアのロシア=アルメニア大学でミニ・シンポジウムを開催した経験がある。同国はアルメニア人の人口比率が98%にも達する旧ソ連には珍しい国家であり、ロシア人人口は1%にも満たない。しかしカフカース唯一の親露国であり、現在でもアルメニア人同士でロシア語を話し続けている同国でのロシア語およびロシア文化への人々の心的態度に関心を抱き続けてきた。このように、当初、本研究課題は純粋に文化学的な目的で旧ソ連諸国におけるロシア語およびロシア文化の位置づけと、各地域での両者の変容のあり方を解明する目的のためにソ連時代についてのオーラルヒストリーを語ってもらい、収集するという方法を採用したに過ぎない。しかし、下述のように、実際に旧ソ連諸国でこの方法での現地調査を行った結果得られたのは、ロシア欧州部から見た「西」、「南」、「東」のいずれかを問わず、1991年12月に崩壊したはずの「ソ連」が人々の心中では未だに生きており、旧ソ連諸国は互いに激しく対立しながら互いを完全な外国と考えてはおらず、しかも「ソビエト文化」が、例えば「密告社会」のように否定的な側面において鮮明に現れるという現実の認識であった。

### 3. 研究の方法

本研究課題は旧ソ連諸国の一般市民のオーラルヒストリーを対象とするため、敢えて、当該諸国の研究者を公式に研究チームに加えることは行わなかった。その理由は、本研究を最初に構想した段階においてすでに南オセチア問題をめぐってロシアとジョージア(旧国名グルジア)が激しく対立していたのみならず、ロシアを含まないいずれの国もソ連を否定しながら自国を「圧政の被害者」として正当化しており、いずれの国の研究者であれ、「旧ソ連に関する研究」であるなどと言った場合にはその時点での自国の公式見解を押しつけてくるのが目に見えていたからである。実際の面接調査におけるインフォーマントを確保するためには現地人のコーディネーターが絶対に必要であるが、政権の代弁者のような人物をインフォーマントとして押しつけられることを避けるため、コーディネーターとしても可能な限り国立大学教員や公務員は避け、「一般人」に依頼するようにした。

本科研究費研究を構想した当初の段階で「ロシア語系住民」という語を用いたのは、柳田が毎年

訪れているウズベキスタンでロシア人を含む欧州系住民(注:出自を問わず現在ではロシア語が母語となっている)を指す語として用いられている「русскоязычный」(英語に直訳すれば“Russian-linguaged”)を直訳したというに過ぎない。しかし、2014年3月のロシアによるクリミア併合の口実の一つに「ロシア語系住民を守る」ことが挙げられていたことに端的に表れているように、この語は全く予想外に政治的にホットとなってしまった。ロシアとウクライナの関係は極度に悪化してウクライナ東部での親露派による自称「人民共和国」とウクライナ政府軍の間の戦闘が現在もなお続き、両国のテレビは連日「荒唐無稽」と形容するほかないプロパガンダを執拗に見せて自国民を呆れさせながらも着実に敵愾心を煽っている。このため、ウクライナにおいてこの種の調査を行うことは、その危険さに鑑み、ソ連史におけるウクライナの重要性を十分に認識しながらも、完全に諦めるほかなかった。

また、ベラルーシは当時「欧州最後の独裁国」と呼ばれ、国民に政権批判の自由が一切なく、しかもソ連時代そのままの秘密警察国家であることが報じられていた。ベラルーシもウクライナと同様に独ソ戦の激戦地なので残念であったが、この種の調査には危険が強く予想されるため対象国から除外した。

かくして、ロシア連邦、ウズベキスタン、アルメニア、ジョージアにバルト三国(エストニア、ラトビア、リトアニア)を加えた国々で、2年目である2017年度以降の本格的な調査を行ったが、いずれの国においても、一般市民を対象とするがゆえに最も妨げになったのは「外国人を見たらスパイと思え」という「ソ連式外国人観」である。そのせいで、コーディネーターがようやくインフォーマントを確保してくれたとしても、「土壇場キャンセル」に遭うことがたびたびある。代表者の柳田はソ連崩壊後一貫して独裁政権が続き、自由選挙や議会政治の経験を持たないウズベキスタンの他にロシアのモスクワ市・州においてもオーラルヒストリー聞き取りにあたった。ところが、驚いたことに、つい数年前まで自由な選挙と活発な議会政治を行っていた大国ロシアの首都である巨大都市モスクワにおいてさえ、常に「スパイなのではないか」との疑惑の対象として扱われることにおいてはウズベキスタンと変わらなかった。上述のように、本研究は、旧ソ連のなるべく多様な地域において、上述のような精神的障壁を溶解させる努力をしつつ、なるべく多様な「普通の人々」からソ連時代の記憶を聞き出してICレコーダの音声ファイルとして記録し、帰国後、研究会で相互に報告し合うという方法で行うこととなった。

#### 4. 研究成果

2019(令和元)年度は本研究の最終年度であり、柳田自身も3名の分担者たちも旧ソ連諸国における現地調査を続けた。しかし、年度末に東京で開催することを計画していた研究会は新型コロナウイルス感染症パンデミックのため開催を断念せざるを得ず、極めて不本意かつ遺憾なことながら、本研究課題の4年間を総括すべき報告と討論の場を持つことができなかった。しかしながら、本科研費研究の当初計画にもある通り、4年計画中の2年目である2017年度の年度末には東京大学文学部で研究会を開いて研究協力者まで含めた研究チーム全員が報告をし、全員が本研究の意義に関する認識を共有するよう努めた。また3年目である2018(平成30)年の12月には東北大学東北アジア研究センターにて一般公開の形でシンポジウムを開き、2016年春~2018年秋の3年間の現地研究の成果を研究代表者と分担者に加え、当時北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター客員教授として滞日中であったカザフスタン人研究者と名古屋大学大学院博士後期課程に在学していた若手アルメニア人研究者を招き、前者にはカザフ映画におけるロシア人の表象の変化に関する講演を、また後者にはアルメニアにおけるアルメニア語とロシア語の2言語併用状況についての報告をいただいた。この段階で本科研費の研究代表者と研究分担者全員が、それぞれの担当地域が互いに遠く離れて気候風土が大きく異なり、元来民族文化においても宗教においても甚だしい違いがあり、しかも今では対西欧関係においても対露関係においても立場を異にして相互に対立し合っている、旧ソ連諸国には明らかに共通した精神文化があるという認識を共有することができた。2019年度の現地調査はその補完のための研究の一環という位置付けだったので、以下では、2018(平成30)年12月に東北大学で開催した公開シンポジウムで得られた共通認識を記す。

2018年秋までに行ったオーラルヒストリー聞き取り調査の結果、旧ソ連諸国の人々の意識中ではソ連は未だ消滅していないと考えざるを得ない諸事実に直面した。旧ソ連各国においてソ連時代の社会主義への否定的評価が公式化した現在にあっても高齢の一般人のほとんどが、例えばフルシチョフによるスターリン批判(1956年、ソ連共産党第20回党大会)のような完全に歴史に属する事件に関してさえ、外国人に話すことはタブーと考えている。ウズベキスタンとモスクワ州で柳田自身が2016-2017年に面談した高齢者で自らスターリンに言及した者はウクライナ、タシケント、アルタイ州生まれのロシア語系住民の女性計4名のほか、ロシア語の音声サンプル採取のために会った同世代のタシケント州出身のウズベク人元女性医師の1名だったが、この5名のうち4名までがスターリンの名を実に懐かしそうに、尊敬を込めて語るのが印象的であった。そして、ただ1名の例外とは、1945年タシケント生まれで現在も同市に住むが高齢にもかかわらず現地3世であるロシア人女性であり、「1981年に母が死ぬ際になってはじめて母が貴族の令嬢であり、少女期に家族のほぼ全員が母の眼前でポリシェビキに銃殺されたことを知った」との理由で「私は貴族の娘だ」としばしば言い、帝政ロシアや西欧の貴族の生活への関心を隠さない人物であった。この人の評価では「スターリンはロシア人ですらない。グルジア人だから尊敬しない。フルシチョフは文盲だった。あまりに下品だったから大嫌い」とのことであ

った。このような例外的な人々を除けばスターリンは幼少期に祖国をナチスドイツに対する勝利に導いた英雄そのものであり、彼ら自身の表現によれば「神のように」敬われる人物であった。フルシチョフは一般にひどく嫌われているが、その最大の原因は農業政策(特に小麦からトウモロコシへの転作の強要)に失敗してソ連が食糧不足に陥り、パンを買うために数時間も並ばなければならなくなったからだと誰しもが口を揃えて言う。しかし、その他に、「英雄だったスターリンを人民の敵にしたから」という理由もあるということも1951年タシケント州生まれのウズベク人男性から聞くことができた。

スターリンは「密告社会」、「秘密警察国家」、「全体主義的国家観」、「プロパガンダ国家」といったソ連の負の側面を確立した人物であり、政敵全員のほか、概数さえも知り難いほど多くの一般市民を粛清した人物だが、ナチスドイツに完勝し、ヒトラーによる奴隷化からソ連諸人民を救った英雄であるとの功績の前にすると、これらは「外国のスパイによる妨害から同志スターリンの政策を守るために仕方ないこと」だったと考えられてしまうのである。

バルト三国は1940年に独ソ不可侵条約の秘密議定書により自らの意思とは無関係にソ連に編入されてしまい、またドイツ軍の敗退とソ連軍の追撃により1944年に再びソビエト共和国とされたという経緯を持つ。本研究におけるバルト三国の担当者は堀口であるが、本報告書を執筆している研究代表者柳田も全体の総括責任者として、我が国の新聞とテレビニュースの片隅や、深夜のBS放送で「紀行番組」や「旅番組」としてひっそりと放映される旧ソ連諸国の現状には知りうる限り目を通して来た。そして、そこにはバルト三国も含まれる。柳田の責による依頼漏れにより堀口は現地民族の人々のスターリン観についての調査はしていない。しかし、この3国の現地民族において中央アジアやロシアの高齢者と全く違うであろうことが容易に予測される。上述したソ連編入の経緯ゆえにこの3国はソ連時代を「占領時代」として否定し、EUに加盟して「西側」の国々となったのであるから、それが当然である。我が国の別々の放送局のBSテレビ番組で、別々のバルト三国出身者が、「ソ連は懐かしいが、ソ連に帰りたくはない」と言っていたが、これは実に象徴的な言葉である。

しかし、甚だ意外なことであるが、「密告社会」、「秘密警察国家」、「全体主義的国家観」、「プロパガンダ国家」というソ連の負の遺伝子を受け継いでいることにおいてはバルト三国もロシアやウズベキスタンと全く同じである。それだけではない。バルト三国は多民族地帯にある小国であるが、そこでこうした負の遺伝子が「国家」、「民族」、「文化」、「言語」がそれぞれ全くの別物であることを無視した危険な思想と結びついて変異し、一層深刻な病弊をもたらしているのである。バルト三国はソ連時代を「占領による暗黒時代」と規定して否定し、EUに加盟して人権尊重の自由主義国となったことにしているが、国家語として定めた民族語(エストニア語、ラトビア語、リトアニア語)の検定試験に合格していないロシア語系住民に対しては就職を制限し、市民に「通報」を奨励しつつ、「言語警察」的の行政機関を使ってロシア語使用を抑圧している。

いかなる国であれ、またいかなる場面に限ってであろうと、人が自分の母語を話すことを禁止する法律を制定することは人権保障上許されない。なぜなら、そうした禁止が「表現の自由」の侵害に該当しないはずはなく、また「個人の尊重」に真っ向から反するものがあることが明らかであるからである。それゆえ、バルト三国が自国民に奨励している行為は、「通報」よりも「密告」と呼ぶ方が相応しい。本研究において堀口がリトアニアのビルニュス(注:リトアニアの首都だが、人口中のリトアニア人比率は63.2%に過ぎない)で聞き取った60歳代女性のロシア語系住民のオーラルヒストリーのうちに、「店員は国家語を話せなければいけないので、たとえ店員の名札に「タチアナ」や「リュドミラ」と書いてあっても、本人の信用を損なわないためにリトアニア語で話しかける。ロシア語に切り替える時は、周りに誰かいないかを見る。苦情が(店員に対して)来るかもしれないので。街中で相手が絶対ロシア人だと思えば、ロシア語で話しかけるが」というものがあるが、これは、国家語関連法制と言語警察(リトアニアにおける名称はValstybinė kalbos inspekcija「国家語監査団」)を用いた同国の言語政策がロシア語母語話者の言語表現を萎縮させると同時にその人格権を侵害していることの端的な証左である。

それにとどまらず、バルト三国のうちエストニアとラトビアは国家語の検定試験に合格していないロシア語系住民には参政権すら与えない。さらにラトビアでは外国語が絶対必要な業種を除き求人条件に外国語の能力を要求することを法律で禁止し、企業側の「営業の自由」の一環を成す「雇用の自由」までも侵害している。しかもこの両国はNHKに協力するたびに「ソ連時代にはエストニア語/ラトビア語の使用が禁じられていた」という、ソ連時代を知る者を唾然とさせる大嘘をさりげなく挟み込む。バルト三国は現にNATOにも加盟しており、親露国ベラルーシとロシアの飛び地カリーニングラード州に挟まれたリトアニアでは志願者に軍事訓練を施し、また学校での軍事教練を開始した。一方エストニアにはドイツ軍を含むNATO空軍が駐留するのみならず、国家公認の民兵組織までもが出現している。いずれも「仮想敵」としているのはロシアである。これは、小国群から大国ロシアへの執拗でしかも露骨な挑発という驚くべき事態であるが、この国々が私服の「言語警察」や、そこへの密告を市民に奨励してまで追求しているのは「Nation-state」という実現不可能な妄想である。このような言語政策は「スターリン主義的」と呼ぶにさえ値しないが、西欧的な個人主義と自由主義からかけ離れたその人権抑圧のおよび大衆扇動的手法だけはスターリン時代のソ連に似ている。ところが、それが可能なのは、この3国の背後に米英仏独という強国を全て含むNATOが控えているからなのである。

2018年度までの本科学研究による研究の最大の成果は、ロシア、バルト三国、カフカース、

中央アジア諸国という旧ソ連諸国においては気候風土、民族集団、母語、宗教、生業、生活様式といったあらゆる面での非常な多様性にもかかわらずそれらの違いを横断する「ソビエト文化」と呼ぶべきものが形成されており、それがいずれの国においても現在に至るまで拭い難く残っているということに気付いたことにある。上では「プロパガンダ国家」、「全体主義的国家観」、「秘密警察国家」、「密告社会」といったソビエト文化の負の側面にのみ言及したが、ソ連には否定的側面だけではなく、無料でアパートが支給されたことや、夏のバカンスには庶民でもごく安い航空運賃と宿泊費でヤルタやオデッサのような保養地へ行って3～4週間も休むことができたことや、極めて安い出費で立派な劇場に入場して一流の演劇、オペラ、バレエを観ることができ、一流の交響楽団によるクラシック音楽のコンサートを聞くことができたことなど、肯定的な側面も大いにあった。これらがみな高価になって庶民には手が届きにくくなったことが不満を招かないはずはない。ロシアのみならず中央アジアとカフカースにおいても、フルシチョフ期以前に学校教育を受け、勤労年代の全てをソ連国民として過ごした高齢のロシア語系住民とは対独戦の戦勝国ソ連の極盛期を事実上の支配民族の成人として過ごした人々である。それゆえ、少年期に自らの意思とは無関係にソ連国民にされてしまったバルト三国の現地民族の同世代の人々とは違い、こうした人々が「ソ連が懐かしいし、もし帰れるものならソ連に帰りたい」と願ったとしても何の不思議もなく、現にそう願っているのである。柳田はこれまでの4年間にわたるモスクワ郊外とウズベキスタンでのオーラルヒストリー聞き取りにより旧ソ連のロシア語系住民のこうした内面の一端を見ることができたが、こうした事実認識に立てばロシアの民族主義者たちのデモでロシア正教のイコンとソ連時代の国旗と軍旗やスターリンの肖像が共存していることに何の矛盾もないことが容易に理解できる。それらはいずれも独ソ戦を勝ち抜きベルリンを陥落させたロシアの最も誇るべき瞬間を象徴するものだからである。そしてまた、ロシア人以外であっても「ナチドイツを倒したのはアメリカ人ではなく、ソ連の全人民だ」との認識および戦後史をロシア人と共有している。これに気付いたことも本研究の重要な成果である。

2019年度に予定していた締めくくりの公開研究会は感染症パンデミックのため開催を断念したので、以下では研究代表者柳田自身の2019年度の研究成果を記す。柳田が主たるフィールドとするウズベキスタンの口語ロシア語は、一方では現地諸民族による不十分な習得と母語の干渉により、規範ロシア語的基準では誤りとしか言いようのない表現が頻出するが、理解可能ならばそれを許容するというリンガフランカに相応しい柔軟な規則を持つ。しかし他方では旧権威語であるロシアのロシア語とは異なる独特の音韻、文法、語彙規則を持ち始めてもいる。また、「ヨーロッパ系」または「ロシア語系」と総称されるロシア語単一言語話者の口頭言語は年齢が若いほど非現地民族の話すこのロシア語リンガフランカに近づいている。これはロシア語の中央アジアへの土着化にほかならず、それによる新言語の芽生えであると言える。

2019年度は、この「リンガフランカと単一言語話者の母語の言語接触による言語変化」という現象について次の段階の研究へ進む重要なステップとなった。東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室から同研究室年報「SLAVISTIKA」への招待論文執筆の機会をいただいたので、9月に前年度までに得た言語学上の知見の一部（この論文では、スラヴ系の形態素のみから成り、本来「兄弟/姉妹」の指小語ないし卑称に過ぎない *братишка/сестрёнка* が「弟/妹」を意味する語として転用されたことと、それにより本来年長か年少かを示さなかった *брат/сестра* が日本語の「兄/姉」と同様の意味で用いられるようになった事実のほか、サマルカンドのヨーロッパ系住民が意味においても音形においても日本語「はい」に非常に近い *Хай* という語を頻用するが、これは同地のタジク語リンガフランカに由来するという事実を援用)を主たる論拠としてウズベキスタンのロシア語の特質に関する上述のような見解を論文にまとめ、同研究室に提出した。この論文とは、「リンガフランカから単一言語話者の母語への影響による言語変化について - ウズベキスタンのロシア語リンガフランカとロシア語単一話者を題材に - 」, 柳田賢二(単著), SLAVISTIKA XXXV号, 頁数15ページ, 東京大学人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室,(招待有、査読無)である。(注: SLAVISTIKA XXXV号は2020年3月刊行予定であったが新型コロナウイルス感染症パンデミックのため編集が最終段階で中断され、現在「掲載確定および校正済み」の状態で止まっている。)

また、2019年度も本科学研究費を主たる財源とし、ウズベキスタンのタシケント、フェルガナの両市およびロシアのモスクワ市・州において現地調査を行った。2019年度の現地研究での成果のうち特筆すべきは、ウズベキスタンの都市部では戦禍で荒廃したソ連のヨーロッパ部から戦災孤児や大量の避難民を受け入れて「ヨーロッパ系」民族のみならず現地民族の人々の家々にも分宿させたことの結果としてウズベク人ら現地民族と「ヨーロッパ系」民族の間の接触が急激に増したという事実を知ったことである。特にタシケントでは帝政期以来「ヨーロッパ人地区」と「ウズベク人地区」はあまり交流がなかったが、戦災避難民があまりにも多く、「ヨーロッパ人地区」を大きくはみ出してウズベク人ら現地民族の家々にも分宿したため、現地民族のロシア語能力が向上するとともに、ウズベク人らの民族語がロシア語に影響を与え始めたという重要な事実をはっきりと前出の1945年生まれだが現地3世のロシア人女性が自ら証言してくれた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 柳田賢二	4. 巻 XXXV
2. 論文標題 リンガフランカから単一言語話者の母語への影響による言語変化について - ウズベキスタンのロシア語リンガフランカとロシア語単一話者を題材に - （注：招待有り。掲載確定、校正済み。ページ数15頁。）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 SLAVISTIKA （注：XXXVIは2020年3月刊行予定だったが、肺炎パンデミックのため刊行遅延中）	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀口大樹	4. 巻 21号
2. 論文標題 ラトヴィアにおける多言語性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 堀口大樹	4. 巻 16号
2. 論文標題 インタビュー調査に基づいたバルト3国のロシア語系住民の言語状況の考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 スラヴ文化研究	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 楢岡求美	4. 巻 XXXIII/XXXIV
2. 論文標題 歴史パノラマとしてのマヤコフスキー ミステリヤ・ブッフ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SLAVISTIKA	6. 最初と最後の頁 19-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 中村唯史	4. 巻 59巻6号
2. 論文標題 ワシーリー・グロスマン小論(前): 身体・機械・自然 あるいは兵士に射す光	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みすず	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村唯史	4. 巻 59巻7号
2. 論文標題 ワシーリー・グロスマン小論(後): 全一的な世界の終わりとその後 『アヴェル』を読む	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊みすず	6. 最初と最後の頁 8-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀口大樹	4. 巻 21号
2. 論文標題 ラトヴィアにおける多言語性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スラヴ学論集	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kumi TATEOKA	4. 巻 1
2. 論文標題 Georgian Stage Performance and Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Dialogue between Georgia and Japan, ed. by Numano M., The Department of Contemporary Literary Studies, The Faculty of Letters, The University of Tokyo	6. 最初と最後の頁 80-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 帯谷知可	4. 巻 CIRAS Discussion Paper No. 80
2. 論文標題 ヒジョブとトルモルの境界 社会主義的世俗主義を経たウズベキスタンのイスラーム・ヴェール問題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範 現代におけるムスリム女性の選択とその行方』	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 楯岡求美	4. 巻 30号
2. 論文標題 「チーフホフの『かもめ』とスタニスラフスキーの演技システム形成期 演劇における内面表現の諸相」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『東京大学文学部次世代人文学開発センター研究紀要 文化交流研究』	6. 最初と最後の頁 53-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 18件)

1. 発表者名 Kumi Tateoka
2. 発表標題 Acceptance and influence of Soviet movies in postwar Japan
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies at The University of Tokyo. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 ": . "
3. 学会等名 III Miedzynarodowa Konferencja Naukowa "Mowie, wiec (kim?) jestem. W poszukiwaniu tozsamosci jezykowej", Uniwersytet Gdanski. (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 Cultural identity for Baltic Russian-speakers: A survey-based study.
3. 学会等名 Convencion scientifica internacional, Simposio de estudios humanisticos, Universidad Central de Las Villas. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadashi Nakamura
2. 発表標題 M. Gorky's Cosmological Perception of the World in the 1910s
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies at The University of Tokyo. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村唯史
2. 発表標題 "
3. 学会等名 日本ロシア文学会第69回全国大会 (於 早稲田大学)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Tadashi Nakamura
2. 発表標題 M. Gorky's Cosmological Perception of the World in the 1910s
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies at The University of Tokyo. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 Cultural identity for Baltic Russian-speakers: A survey-based study.
3. 学会等名 Convencion scientifica internacional, Simposio de estudios humanisticos, Universidad Central de Las Villas. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 ": . "
3. 学会等名 III Miedzynarodowa Konferencja Naukowa "Mowie, wiec (kim?) jestem. W poszukiwaniu tozsamosci jezykowej", Uniwersytet Gdanski. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kumi TATEOKA
2. 発表標題 Acceptance and influence of Soviet movies in postwar Japan
3. 学会等名 The 10th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies at The University of Tokyo. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 柳田賢二
2. 発表標題 共同研究 「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」
3. 学会等名 東北大学東北アジア研究センター研究成果報告会 2017
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳田賢二
2. 発表標題 ロシア語との対照における日本語子音体系の特徴
3. 学会等名 第5回日露人文社会フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳田賢二
2. 発表標題 ロシア人にとってパラドキシカルな日本語なまり - 日本語のモーラ言語性と母音無声化および前舌子音音素の少なさの干渉について
3. 学会等名 日本ロシア文学会東北支部2018年度研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 柳田賢二
2. 発表標題 日本での報道の片隅に現れたバルト3国のロシア語系住民の現状とそれにかかわる旧ソ連他地域の人々の言説に見られる言語観、民族観および国家観
3. 学会等名 2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム（兼 本科研費公開シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 The Russian-speaking population's attitudes toward the designation of "Russian-speakers" in the Baltic states
3. 学会等名 Language, Identity and Education in Multilingual Contexts, Mercure York Fairfield Manor Hotel（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Daiki Horiguchi
2. 発表標題 The linguistic identity of Russian-speakers in the Baltic states: A survey of their attitudes towards the state language
3. 学会等名 Forging Linguistic Identities, Towson University (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀口大樹
2. 発表標題 バルト3国におけるロシア語系住民の言語意識 インタビュー調査をもとに
3. 学会等名 2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム（兼 本科研費公開シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tadashi Nakamura
2. 発表標題 " "
3. 学会等名 International Scientific Conference "Cross-Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching". Tbilisi State University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村唯史
2. 発表標題 アルメニア、ジョージア（グルジア）見聞譚：2018年夏
3. 学会等名 2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム（兼 本科研費公開シンポジウム）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kumi Tateoka
2. 発表標題 " (2002) (エヴゲニー・グリシュコヴェツの戯曲『私はどうして犬を食べたか』(2002)における文化的異質性と登場人物の造形)
3. 学会等名 Caucasus: Cross-Cultural Cross-Roads, Russia-Armenia University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Kumi Tateoka, Tadashi Nakamura
2. 発表標題 Round-table discussion
3. 学会等名 Multiculturalism and the Soviet Regime, Cultural Studies: Emic-Etic Correlation in Research and Teaching, Tbilisi State University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 楯岡求美
2. 発表標題 クラスノダールの“グルジア人”たち：再移住者したロシア人の歴史的背景と現在
3. 学会等名 2017年度～2019年度東北大学東北アジア研究センター共同研究「オーラルヒストリーによる旧ソ連ロシア語系住民の口頭言語と対ソ・対露認識の研究」2018年度公開シンポジウム（兼 本科研費公開シンポジウム）(国際学会)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 (編集代表) 沼野充義、望月哲男、池田嘉郎、(編集委員) 井上まどか、熊野谷葉子、鴻野わか菜、坂庭淳史、楯岡求美、乗松亨平	4. 発行年 2019年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 886
3. 書名 ロシア文化事典	

1. 著者名 服部 倫卓、原田 義也	4. 発行年 2018年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 416
3. 書名 ウクライナを知るための65章（中村唯史執筆担当：第11章「オデッサ - "黒海の真珠"の光と影」（70-74頁）、第36章「ロシア文学とウクライナ - 言語、民族、トボスの錯綜」（206-211頁））	

1. 著者名 中村唯史・大平陽一（共編著）、中村唯史、大平陽一、三浦清美、武田昭文、奈倉有里、梅津紀雄著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 288
3. 書名 自叙の迷宮：近代ロシア文化における自伝的言説（中村唯史執筆担当「序：自叙についての迷宮の前書き」11-17頁、「自叙は過去を回復するか：オリガ・ベルゴーリツ『昼の星』考」259-275頁、「後書きに代えて：自叙と歴史叙述のあいだ」277-288頁）	

1. 著者名 定延利之編著、新井潤、岩本和子、ヴォーグ=ヨーラン、奥村朋恵、乙武香里、金田純平、鎌田修、国村千代、三枝令子、桜井直子、宿利由希子、瀬沼文彰、大工原勇人、楯岡求美、ダヴィッド=ドゥコーマン、仁科陽江、萩原順子、波多野博顕、林良子他8名著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 480
3. 書名 限界芸術「面白い話」による音声言語・オラリティの研究（楯岡求美執筆担当「4章エスニック・ジョーク論理（4）ロシアの笑い話におけるエスニック・ステレオタイプ」、406-437頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 唯史  (Nakamura Tadashi)  (20250962)	京都大学・文学研究科・教授   (14301)	
研究分担者	楯岡 求美  (Tateoka Kumi)  (60324894)	東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・准教授   (12601)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	堀口 大樹  (Horiguchi Daiki)  (50724077)	岩手大学・人文社会科学部・准教授    (11201)	
研究 協力者	帯谷 知可  (OBIYA Chika)		
研究 協力者	毛利 公美  (MOURI Kumi)		